

患難をこえてきつ

今井健次

人生には患難はつきものである。そしてそこには何時も近くに誰かがいた。生死にかかわるような場合も何度かあったが、それら一つ一つについて述べることはできない。

まだ四、五才の頃、家で遊んでいたら急にラッパやタイコの楽隊がやって来たので、飛び出してみたら紺の制服のような物を着た数人の男女がおり、周りに何人かの近所の人が集まっていた。その中に入っていたら間もなく楽隊が止み、制服の男の人が箱の上で何やら話を始めた。子供だから内容は分からないが、その声が熟してきたと思ったら制服の女の子の顔が、段々涙で濡れてくるのである。何か困難が有るのだろうか、悲しい事があるのだろうか。然しその時の雰囲気は子供心にも異常で、人に聞いてみる気にもなれず、自分一人の心に入れておく事になった。

もう少し大きくなったある夏、疫痢になった。その時は父母は大変心配したようだが、寝ていた本人は患難らしいものを感じずることも無く、直つてから外を歩くのにふらふらして一人では歩けず、確かに苦しみがあった事は覚えている。成長して高校入試のときは、

相当勉強して頑張ったのだが、失敗して患難と苦痛を感じたが、それから一年間は自由であつた。

昭和十六年十二月八日、大学の学生寮で朝食をしていたら、突然ラジオが鳴って太平洋戦争の開戦が告げられた。この時は全学生が期せずして直立起立した。一人一人、時間と場所は違つても死地に近づいた事を感じたからであらう。幸い生き残つたが、一億総失業。東京に青草がある限り東京に残る等威勢の良い事を考えたが、世の中はそれどころではなかつた。そんな時、キリスト教家族の妻と結婚する事になった。そのおかげでいつの間にかキリストの僕となり、主にある患難は主の恵みと思えば無いに等しい。

「主よこころみに会わせず、悪より救い出し給え」アーメン。